京都大学学生生活白書

平成21年度《学生生活実態調査》のまとめ－概要－

京都大学学生部

目 次

A. 調査に協力してくれた人たち …… 1
B. 家庭状況 …… 1
C. 住居と通学 …… 3
D. 生活費の状況 …… 4
E. アルバイト …… 5
F. 食　　事 …… 6
G. 耐久消費財 …… 7
H. 学内施設の利用 …… 8
I. 入学と学業 …… 9
J. 課外活動（サークル・ボランティア活動） …… 11
K. 旅　　行 …… 12
L. 健康・悩み …… 13
M. 進路（進学・就職） …… 14
N. そ の 他 …… 15

※本書では調査結果を小数点第２位で四捨五入し、小数点第１位までの表記としています。したがってグラフの数字を合計しても 100.0%にならない場合や合計欄の数字にならない場合があります。また、過去の白書から引用した数字は小数点第１位で四捨五入されているものもあります。
※文中の数字は無回答、設問非該当を除いている場合がありますので必ずしも表･グラフの数字とは一致しません。

表紙カット＝京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史－写真集』：京都大学後援会（1997）より

A. 調査に協力してくれた人たち

京都大学の学部と大学院に在籍する学生を対象に学生生活の実態を把握し、キャンパス全般の環境整備に役立てるため、昭和28年以降『学生生活実態調査』を実施しています。

すべての京大生のうち学部学生(以下学部生)・大学院学生(以下院生)からそれぞれ7人に1人の割合で、2,956人を無作為に抽出し、平成21年10月にアンケートを実施したところ、1,689人から回答が寄せられました。調査に協力してくれた学生諸君に感謝いたします。

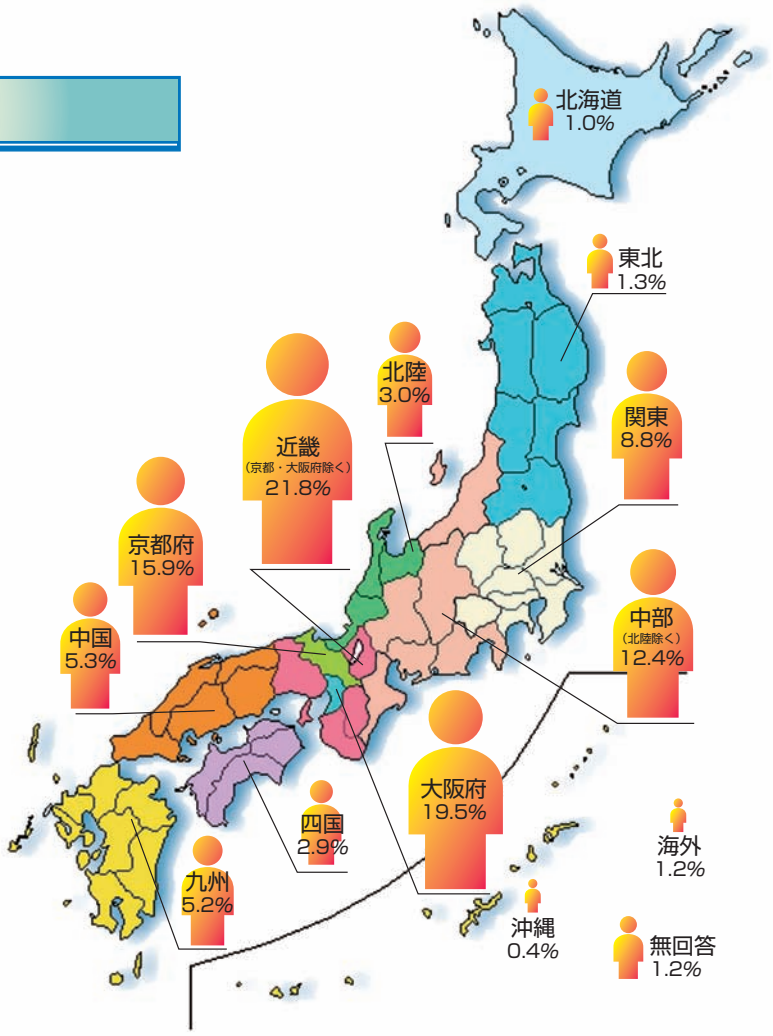
学部・大学院	学部学生	修士課程	博士課程	専門職学位課程	合　計
総合人間学部	45				45
文学部・文学研究科	80	20	9		109
教育学部・教育学研究科	28	12	4		44
法学部・法学研究科	43	1	4		48
経済学部・経済学研究科	100	4	7		111
理学部・理学研究科	66	88	59		213
医学部・医学研究科	47	17	54	5	123
薬学部・薬学研究科	35	27	12		74
工学部・工学研究科	311	144	36		491
農学部・農学研究科	107	82	28		217
人間・環境学研究科		25	5		30
エネルギー科学研究科		23	6		29
アジア・アフリカ地域研究研究科			10		10
情報学研究科		34	11		45
生命科学研究科		24	17		41
地球環境学堂・学舎		8	7		15
法科大学院				32	32
公共政策教育部				6	6
経営管理教育部				6	6
合　　計	862 (46.8%)	509 (83.6%)	269 (67.4%)	49 (46.2%)	1689 (57.1%)

( )内の数字は回収率を表す。 アジア・アフリカ地域研究研究科は５年一貫のため１・２回生も修士課程に算入。

B. 家庭状況

近畿圏出身の学生が過半数

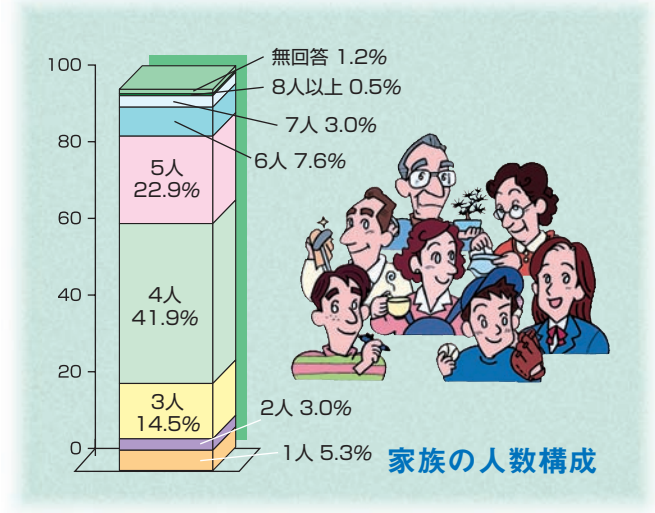
京大生の家庭所在地は、全体の57.2%が近畿圏で、大阪府19.5%、京都府15.9%となっている。京都・大阪府で3分の1という数字は前回と変化がないが、大阪府が若干増加し、京都府が若干減少している。学部生では、57.2%が近畿圏で、大阪府23.5%、京都府9.9%、修士課程学生(以下修士)では、55.4%が近畿圏で、大阪府17.0%、京都府15.8%となっているのに対して、博士課程学生(以下博士)では、63.1%が近畿圏で、大阪府12.3%、京都府36.2%と京都府に家庭があるという回答が最も多い。これは博士課程学生に親族の扶養を離れ独立生計をたてている割合が多いことが関係するものと考えられる。



京大生の出身地分布

家族の人数(本人を含む)は、《4人》が41.9%と最も多く、ついで《5人》の22.9%、《3人》の14.5%の順である。前回は《4人》とする回答が41.2%、《5人》とする回答が23.7%であった。両親については、扶養を受けている学生のうち96.0%が《父母とも健在》と回答している。

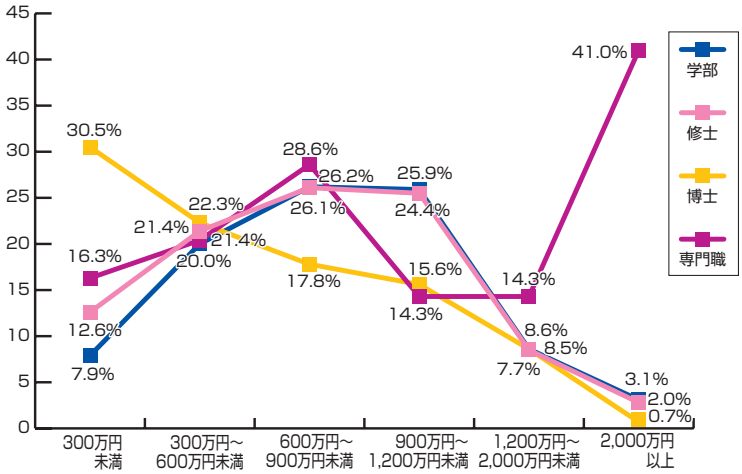
既婚者は、学部生では0.2%(実数2名)、修士では1.2%であるのに対して、博士では18.4%、専門職学位課程学生(専門職)では16.3%と高くなる。前回の調査では博士課程学生と専門職学位課程学生の既婚率はそれぞれ14.9%、11.1%であったので、大幅に増加している。また博士課程学生のうちで自分の子どもをもつ者の割合は10.9%であり、専門職学位課程学生のうちでは12.2%であった。



家族の人数構成

《家計支持者》は、学部生では《父》が89.7%、《母》が9.1%、修士では《父》が86.7%、《母》が7.6%で、これらの数字は前回と同様であるが、博士では《本人》とする者が35.6%、《配偶者》とするものをあわせると43.2%になり、前回の33.6%、前々回の26%よりも大きく上昇している。また、専門職では《本人》とする者が16.3%、《配偶者》とする者10.2%と配偶者の割合が博士に比べて高い。

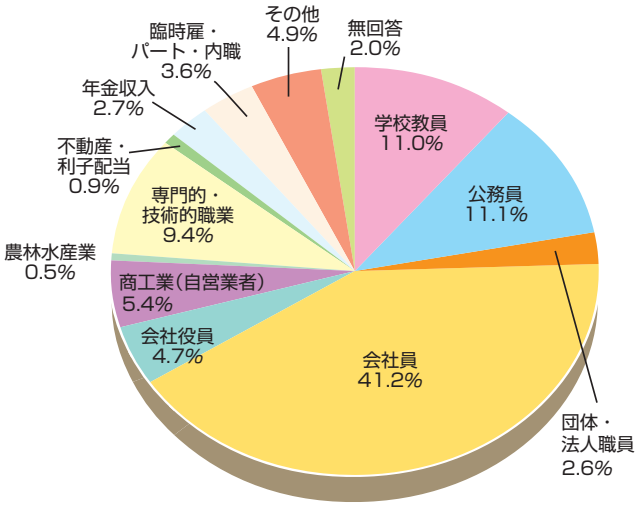
家計支持者の年収の分布



博士の3割は、家計の年収が300万円未満

家計の年収の分布は、全体では《300万円未満》が13.1%、《300万円以上600万円未満》が20.8%、《600万円以上900万円未満》が24.9%、《900万円以上1,200万円未満》が23.4%、《1,200万円以上2,000万円未満》が8.4%、《2,000万円以上》が2.4%である。学部生と修士については、図に示すように、家計の年収が《300万円未満》の者の割合は約1割であるが、博士では、その割合は30.5%となっている。前回調査では《家計の年収》ではなく、《主な家計支持者の年収》を尋ねており、それが《300万円未満》であった博士の割合は26.9%であった。年収の定義を広げたにもかかわらず、低年収者の割合が増えていることは、平成20年のリーマン・ショック以降の不況の影響がうかがえる。

主たる家計支持者の職業



主な家計支持者の職業は、全体では《会社員》が最も多く41.2%、《学校教員》、《公務員》、《専門的技術職業》が10%前後で続いており、前回、前々回と同様の分布を示している。博士については《会社員》の割合は相対的に低く、《専門的技術職業》と《その他》が相対的に高いが、それは自分自身が主な家計支持者の場合に、自分の職業を《専門的技術職業》あるいは《その他》と回答しているためであると考えられる。

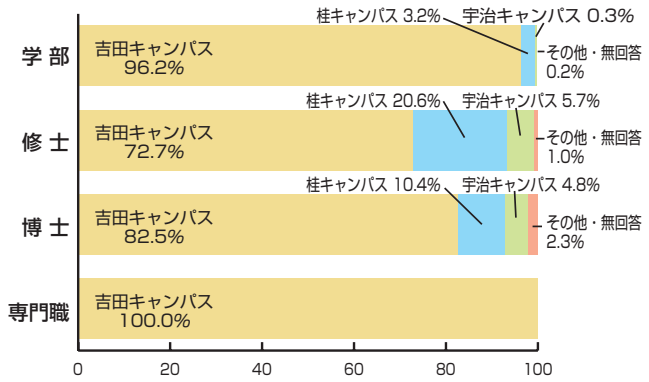
C. 住居と通学

自宅外生が約7割、その9割はアパート･マンション等に一人住まい

《自宅生》の割合は、前回と同様に微増傾向にあり、全体で32.9%であった。学生区分別では、修士が前回と同じであったことをのぞき、すべて増加しているが、とくに博士は54.1%、専門職は42.9%であり、年齢とともに親から独立して家庭を持つ学生が増えていることによると思われる。また、通学しているキャンパスは、87.0%が吉田、9.5%が桂、2.7%が宇治、その他が0.7%であったが、大学院生では、桂と宇治が増え、修士が、5.7%宇治、20.6%桂、博士が、4.9%宇治、10.4%桂となっている。キャンパスから《2km以内》に居住する学生は、前回より微増し58.0%になり、《10km以遠の京都市内》が2.9%に減少した。《大阪・滋賀・奈良県》の居住者も全体で15.4%と微増したが、修士では減少し、博士では増加しており、専門職では18.8%と前回と同様であるが他と比較して多い傾向にある。

自宅外通学者の住居の種別では、《アパート》《マンション》が合計で92.5%、《一人部屋》は93.0%で、前回と大きな変化は無い。部屋の広さは、大半の学生(92.4%)が《7.5㎡(4.5畳)から20㎡(12畳)未満》に住居しているが、《3畳未満》の学生も全体で2.8%、博士では4.2%いる。

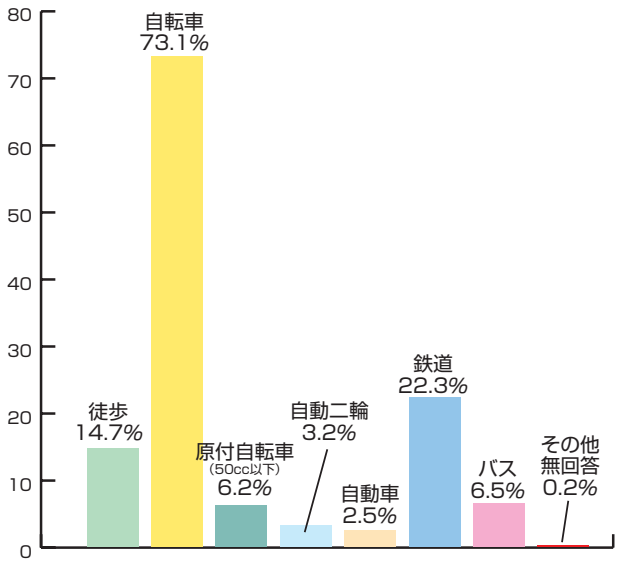
通学キャンパス



主な交通手段は自転車、徒歩のみがやや増加

通学の主な交通手段は大半が《自転車》で63.7%であり、前回(63.2%)と同様であるが、《原付自転車》《自動二輪》合計の7.5%(前回9.3%)と《鉄道》《バス》合計の18.0%(前回19.1%)は減少し、増加したのは、《徒歩のみ》8.8%(前回6.3)であった。通学の片道所要時間は《15分未満》が59.0%と前回(56.5%)より増加したが、《30分未満》に広げると74.9%と前回(77%)より減少している。学生区分別でも、《15分未満》は、約60%だが、修士・博士は、《15分以上30分未満》が20%超と学部学生の約2倍で、課程が進み生活に慣れると、大学への距離以外の要素も住居選択の理由となっているようである。一方、専門職は《15分未満》が46.9%と低く、《片道90分以上》が18.3%と他と比較して倍近く多い。

交通手段(複数回答)



D. 生活費の状況

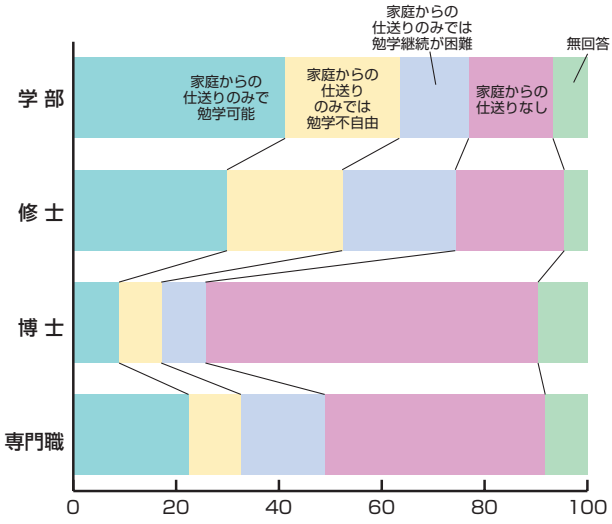
収入の部

京大生の平均月収は、前回調査と比較し、学部生で5,500円減、修士で1,900円増、博士で9,200円減、専門職で5,800円増となった。平均月収のうち《家庭から》の仕送りは、それぞれ6,600円、1,200円、6,300円、7,700円減少し、それが占める割合もそれぞれ3%、1.5%、2.5%、6.5%低下した。他方、《奨学金・研究奨励金》は、それぞれ2,400円、6,700円、10,200円、7,300円増加した。《アルバイト》収入は、それぞれ800円減、900円増、11,800円減、12,500円減となった。また、「家庭からの仕送りと勉学との関係」の調査項目で、《家庭からの仕送りのみでは勉学不自由》および《家庭からの仕送りのみでは勉学継続が困難》と回答した学生の割合がそれぞれ5.4%および6.6%増加し、合計で37.5%に達した。近年の経済情勢の悪化が、家庭からの仕送り額の減少に反映され、学生生活にも大きな影響を与えているようである。

支出の部

京大生の1ヶ月の平均支出額は、前回調査と比較し、学部生で4,700円減、修士で7,500円増、博士で7,400円増、専門職で22,800円増となった。毎日の生活に必要な基礎支出費《食費、家賃、光熱水道費》が全体の支出に占める割合は54%で、前回調査とほとんど差異がない。勉学に学部生で6,500円、修士で7,800円、博士で18,800円、専門職で18,400円支出し、四者の間に差がみられた。また、《剰余金・預貯金》は、それぞれ14,100円、20,400円、49,100円、18,000円で、四者の間に差がみられた。支出のうち、最も増やしたい項目として、《衣服・嗜好品・日用雑貨》と《勉学費》をあげ、最も減らしたい項目として、《食費(含・外食費)》をあげていた。

家庭からの仕送りと勉学との関係（%）



平均収支金額

1ヵ月の平均収入金額

（単位：千円）

区　分	家庭から	奨学金・研究奨励金	アルバイト	そ　の　他	収入合計
学　部	62.52	16.58	27.11	1.08	107.30
修　士	57.53	50.56	22.17	2.00	132.25
博　士	19.25	103.67	78.56	14.03	215.51
専門職	52.87	54.62	9.28	37.00	153.77

1ヵ月の平均支出金額

（単位：千円）

区　分	食費（含・外食費）	住居費（家賃・光熱水料）	衣服・嗜好品・日用雑貨	勉学費(教科書・参考書・文房具・交通費等)	課外活動・教養娯楽費	情報・通信費	医療費（含・健康保険の掛金）	その他	剰余金・預貯金	支出合計
学　部	25.07	36.56	10.58	6.51	8.31	3.66	0.88	1.63	14.08	107.30
修　士	30.67	45.10	10.81	7.77	7.85	4.92	1.39	3.32	20.42	132.25
博　士	41.16	55.88	14.88	18.77	12.29	7.50	6.67	9.27	49.10	215.51
専門職	36.06	44.62	10.64	18.36	8.89	6.87	4.11	6.26	17.96	153.77

E. アルバイト

アルバイト学生の割合が増加

《アルバイトはしなかった》という学生の割合は全体で29.1%であるが、学部では21.7%と平均を下回り、前年度と比べても4%程度低下している。一方、博士では45.9%と平均を大幅に上回り昨年度よりも6%増加している。経済の低迷と博士への奨学金などの制度拡充の影響が現れているのであろう。なお、専門職では前年度同様《アルバイトはしなかった》学生の割合が70.8%と多い。

職種(1･2位)については、学部では、《飲食店》が32.6%、《学習塾講師》が28.9%、《家庭教師》が24.9%の順、修士では、《教育研究補助TA･RA》が34.3%、《学習塾講師》が21.2%、《家庭教師》が15.3%の順となり、博士では、《教育研究補助TA･RA》が62.0%と大半を占める結果となった。大学院におけるTA･RA制度拡充の影響が数値として現れているが、その制度の効果が十分であることを示すものではない。

月平均労働時間については、学生全体の40.6%が30時間以上労働しており、生活のかなりの割合をアルバイトが占めていることが分かる。

アルバイトの紹介先(1･2位)は、学部では《友人･知人･先輩》の43.5%と《紹介誌･新聞広告･チラシ》の36.2%が主となっているが、修士では《友人･知人･先輩》が42.5%、《教員》が29.3%の順となり、研究室活動の影響が現れている。さらに博士では57.4%と《教員》が紹介する《教育研究補助》の割合が増えていることが分かる。逆に学部生の大学との関係は教室での講義が中心となっていることが窺える。

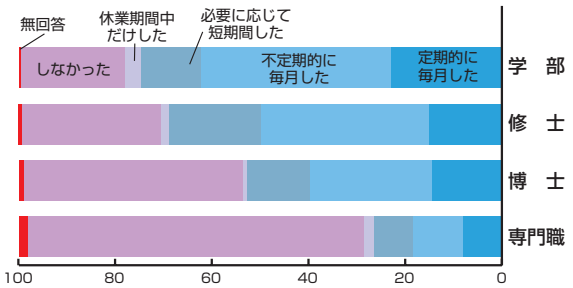
アルバイト収入の使途(1･2位)については、学部では《衣食住費》が49.3%、《勉学費》が13.3%、《教養娯楽費》が52.6%、修士では《衣食住費》が63.5%、《勉学費》が17.5%、《教養娯楽費》が45.4%、さらに博士では《衣食住費》が80.6%、《勉学費》が51.8%、《教養娯楽費》が16.5%と、次第に勉学重視の生活へとシフトしている様子が確認できる。

アルバイトと学業の関係について、《ほとんど支障はなかった》が全体で69.4%となり、学部、修士では7割を超えているが、博士では57.7%と前回よりわずかではあるが減少している。

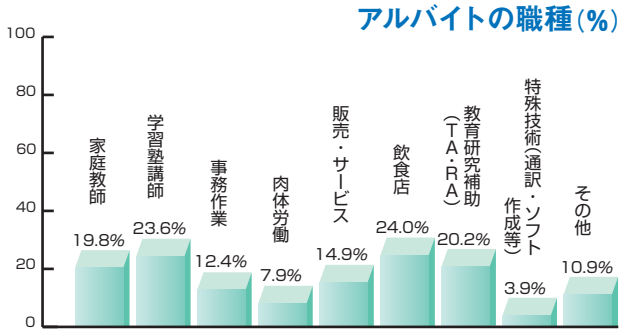
アルバイトをしなかった理由について、《やりたかったが時間的余裕がなかった》が62.7%と半数以上を占めている。また、《経済的に不要》が全体で20.1%となり、こちらは前回より減少している。

アルバイト経験の感想について、全体の70.2%が《人生(社会)経験が得られて有意義であった》としているのは、前回と同様の傾向であり好ましい傾向ではある。

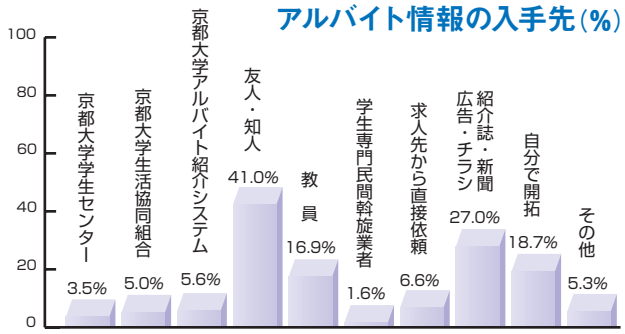
アルバイト状況(%)



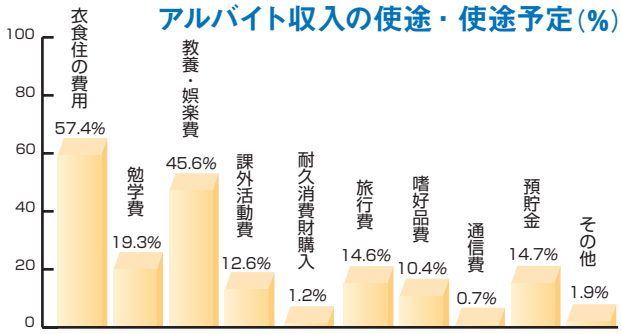
アルバイトの職種(%)



アルバイト情報の入手先(%)



アルバイト収入の使途・使途予定(%)

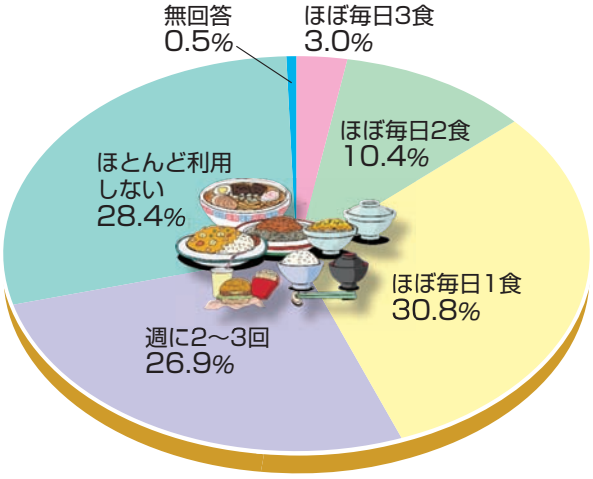


F. 食　　事

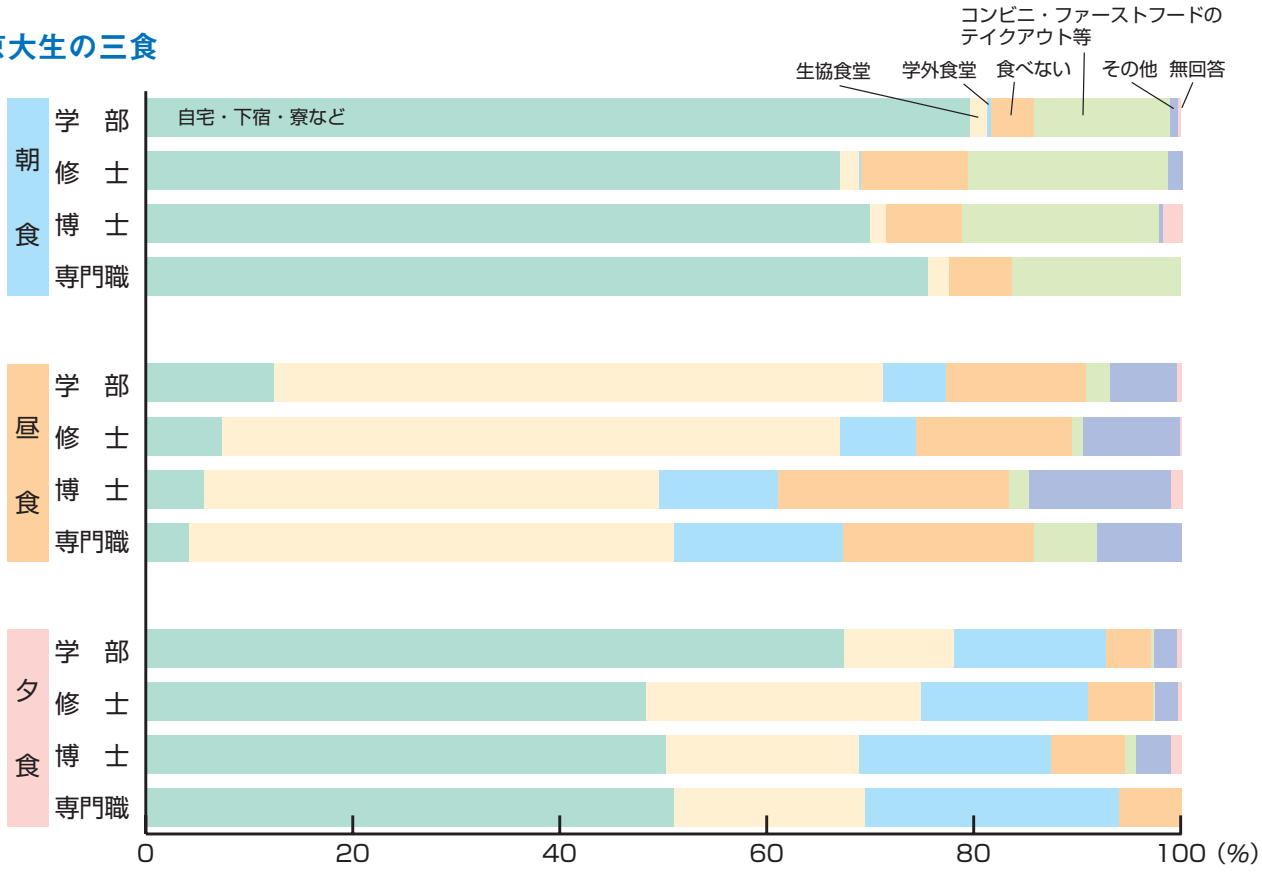
朝食は自宅、昼食は生協食堂、夕食は自宅で取るのが典型的パターン

朝食は主として《住居(自宅、下宿、寮)》で取っている学生が74.4%である。一方で、《朝食抜き》は16.1%に上る。また昼食は、《生協食堂》が56.6%、《コンビニ・ファーストフードのテイクアウト》が15.6%に上る。夕食は、《住居》が58.8%、《生協食堂》が17.0%、《学外食堂》が16.1%となっている。生協食堂を使う頻度は、《毎日1食》が30.8%、《毎日2食》が10.4%、《週に2-3回》が26.9%、《殆ど利用しない》が28.4%となっている。利用しないことの最大の理由は、《混雑していること》で31.1%である。住居での食事が意外に多いが、同時に慌ただしい学生生活の様子がうかがわれる。

学内食堂の利用状況



京大生の三食

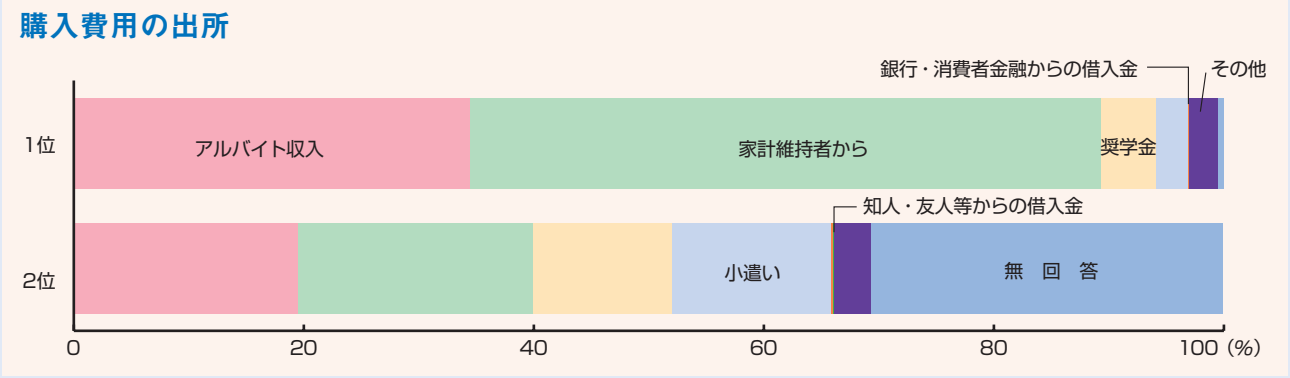


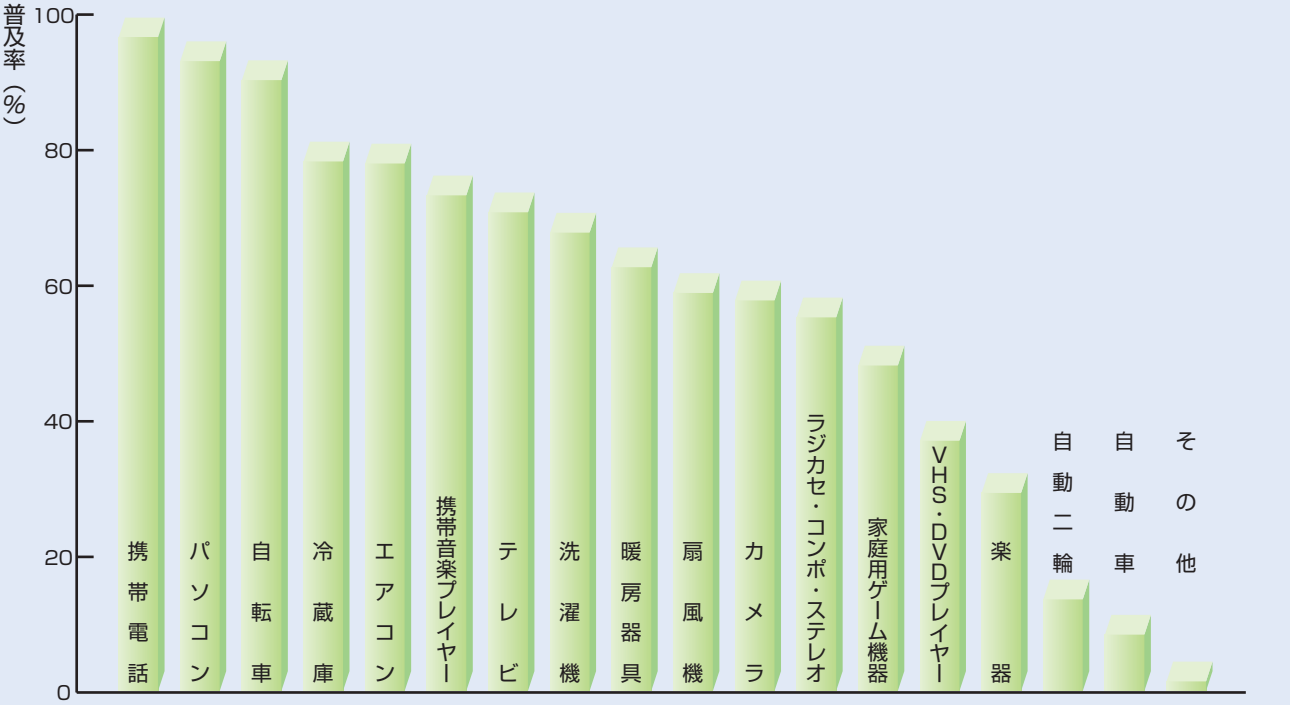
G. 耐久消費財

ついに、パソコンの所有率が自転車を抜き、93%に

所有率が最も高い耐久消費財は、前回の調査と同じく《携帯電話》であり、全体平均で96.6%、課程ごとの平均でも93.9～97.3%と全課程ともほぼ所持している。次は、《パソコン》の93.1%（学部学生平均でも90.8%）となり、ついに《自転車》の90.3%を抜いた。パソコン所有者はそのうち90.4%が自宅でインターネット接続している。所有率の4位以降は、《冷蔵庫》が78.3%、《エアコン》が78.0%、《携帯音楽プレイヤー》が73.2%、《テレビ》が70.7%、《洗濯機》が67.8%の順であった。

これらの耐久消費財購入の出所第1位は、55.2%が《家計維持者》、34.6%が《アルバイト収入》、4.8%が《奨学金》に頼っている。ただし、家計維持者による割合は学部生、修士、専門職、博士の順に減少している。なお、出所の第2位で、《家計維持者》は20.4%を占めており、1位、2位を合わせ75.7%の学生は家計維持者に耐久消費財の購入を依存している。なお、《金融機関や知人からの借入》を第1位とする学生は1名のみであり、この点での心配は少ないと思われる。





京大生が所有している耐久消費財と購入費の出所

H. 学内施設の利用

附属図書館の利用頻度は前回より若干上昇、生協購買部は低下

京大生がもっとも頻繁に活用する学内施設は、生協購買部と図書館である。生協購買部については《ほとんど毎日利用する》と《週に2～3回程度利用する》を合わせると、6割を超えるが、前回調査の7割超と比較すると、利用頻度は低下している。吉田キャンパスのコンビニ「ナチュラル・ローソン」の利用は、学部生に限ると《ほとんど毎日利用する》は2.7%、《週に2～3回程度利用する》が14.9%であるが、これも前回調査より低い。レストランの利用は、カンフォーラを除いては学部生・院生ともに著しく低い。こうした傾向は前回と同じである。

附属図書館については、《ほとんど毎日利用する》と《週に2～3回程度利用する》を合わせたものは、全体では2割程度であるが、学部生と専門職では約3割である。前回調査と比べると附属図書館の利用頻度は若干上昇している。他方、修士および博士では1割以下であり、《まったく利用しない》という回答もそれぞれ20.4%、26.0%であった。各学部の図書館利用については、《ほとんど毎日利用する》と《週に2～3回程度利用する》を合わせたものは、2割程度であるが、ここでも専門職では、4割を超える。

総合体育館、総合博物館などの施設については著しく利用者は少ないが、総合体育館についてはクラブ活動で占有されているが、一般の学生も使用できるようにしてほしいという要望も少なからずみられた。(自由記述編参照)

保健管理センター、保健診療所などの施設は、必要に応じて活用されており、《年に数回利用する》という回答が2割近くを占める。キャリアサポートセンターの利用は全体で前々回の8.3%、前回の13.5%から、17.6%に増加しているが、特に修士では28.4%が利用しており、他の課程の倍以上となっている。

満足度の高い附属図書館

今回調査では、初めて利用者の満足度(5段階評価)もあわせて調査した。表に示す通り平均満足度の最も高い学内施設は附属図書館であった。また平均満足度が最も低かったのはクラブ・サークル部室と桂キャンパスのレストラン「ハーフムーンガーデン」であった(最も低いといっても、その値は「普通」を示す3である)。また他の大部分の施設の平均満足度は3.5～4の値であった。

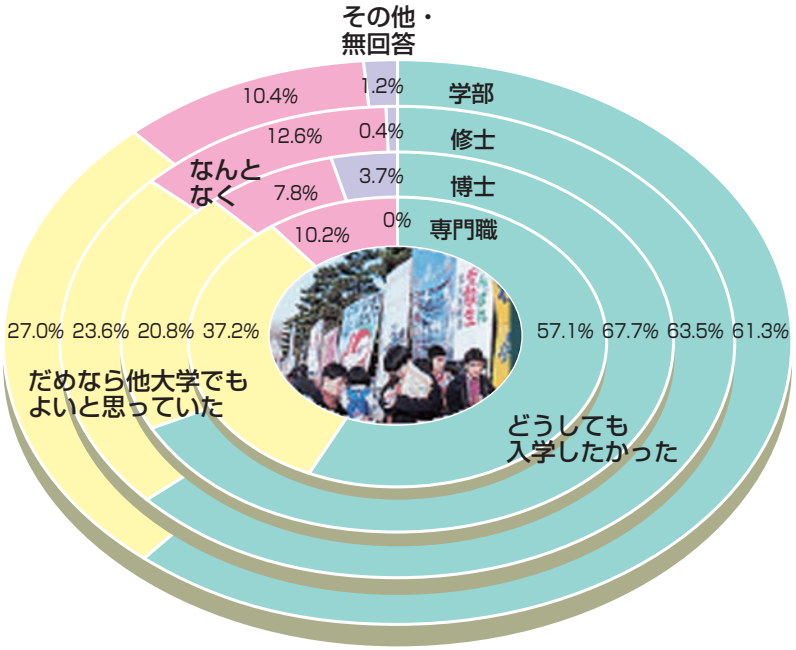
(%)

区分	ほとんど毎日	週に2～3回程度	月に2～3回程度	年に数回程度	全く利用しない	存在を知らない	平均満足度
附属図書館(総合図書館)	4.8	15.7	27.8	37.5	13.8	0.4	4.1
学部等の図書館・図書室・資料室	3.8	13.7	27.7	34.4	19.2	1.1	3.8
学術情報メディアセンター南館	0.7	6.1	13.0	30.8	46.5	2.9	3.7
保健管理センター	0.0	0.1	0.4	16.0	58.9	24.7	3.5
カウンセリングセンター	0.0	0.1	0.6	2.2	68.9	28.2	
保健診療所	0.1	0.1	0.5	21.6	58.7	19.0	3.5
総合体育館	2.0	4.4	5.5	12.2	71.7	4.2	3.4
総合博物館	0.0	0.3	0.8	19.0	74.0	5.9	3.7
キャリアサポートセンター	0.0	0.6	3.8	13.2	63.7	18.7	3.7
スポーツ指導・相談室	0.0	0.1	0.3	0.3	49.8	49.6	
クラブ・サークル部室	9.5	6.1	4.4	4.0	61.5	14.5	3.0
女性研究者支援センター	0.1	0.1	0.3	0.7	62.5	36.4	
運動グラウンド	2.6	2.4	4.1	12.1	73.5	5.3	3.2
生協購買部	23.7	39	24.4	7.8	4.5	0.5	3.7
ナチュラル・ローソン(吉田南キャンパス)	1.4	9.1	18.5	29.5	36.1	5.3	3.8
カンフォーラ(吉田キャンパス)	0.2	0.7	9.0	47.6	39.1	3.5	3.7
ラ・トゥール(吉田キャンパス)	0.0	0.1	0.7	12.5	76.0	10.7	3.7
ハーフムーンガーデン(桂キャンパス)	0.7	1.4	1.8	3.2	35.9	56.9	3.0
ラ・コリーヌ(桂キャンパス)	0.3	0.8	1.2	2.2	37.4	58.1	3.4

※無回答を表から除外しています

I. 入学と学業

「どうしても入学したかった」は6割、ただし志望動機は大学と大学院で異なる。



京都大学・大学院への入学希望度

《どうしても入学したかった》と回答した京大生は全体で63.0%と、前回とほぼ同じである。内訳は、学部61.4%、修士63.5%、博士67.7%と課程の進行とともに増えている。専門職でも57.1%　と、前回の調査よりも増加している。《だめなら他大学でも良いと思っていた》割合は全体で25.3%と前回より微増した。この内訳は、専門職が37.2%と最も高いが、他は、学部27.0%、修士23.6%、博士20.8%と課程の進行とともに減少傾向になり、京大への愛着が増しているようだ。

入学の動機は、前回と同様、学部の20.2%と専門職の22.4%で《社会的評価が高い》が第1位の最多数となったのに対して、修士の16.8%と博士の24.0%では《スタッフ・設備が優れている》が第一位に選ばれた。《京大の伝統や雰囲気に憧れていた》については、過去の3回の調査で、減少傾向が見られていたが、今回は全体で15.7%(前回12.6%) と持ち直した。課程別で比較すると、最も高いのは学部で19.4%(前回16.8%)、低いのは修士の11.0%(前回7.6%) であった。修士では京大というブランドよりも専門性が重視されているということであろう。他に多く選ばれていたのは、《就職前に深い専門知識を身につけたかった》《将来の就職を考えて》で、いずれも、学部と博士に比べ、修士と専門職で多く、専門職では、前回(16.7%, 5.6%)から今回(20.4%, 15.3%) と増加傾向にある。

学部･学科等を選択する際に重視した二点については、全体で81.8%が《自分が惹きつけられた学問分野である》を選んでおり、ついで《最先端の学問が学べる》29.0%、《社会のために役立つ分野である》20.9%、《将来なりたい職業に就くのに必須の分野である》16.5% 、《学部・学科・大学院専攻等の教員に魅力を感じる》15.2%と続く。前回の調査とは、3番目と4番目の順位が逆転していた。この順位は、修士・博士では、《学部・学科・大学院専攻等の教員に魅力を感じる》が三番目となる。一方、専門職では、まず《将来なりたい職業に就くのに必須の分野である》53.1%、次に《自分が惹きつけられた学問分野である》42.9%が選ばれている。《最先端の学問が学べる》を第1位に挙げた学部生は、前回(9.5%) から微増して10.9%とほぼ横ばいとなった。

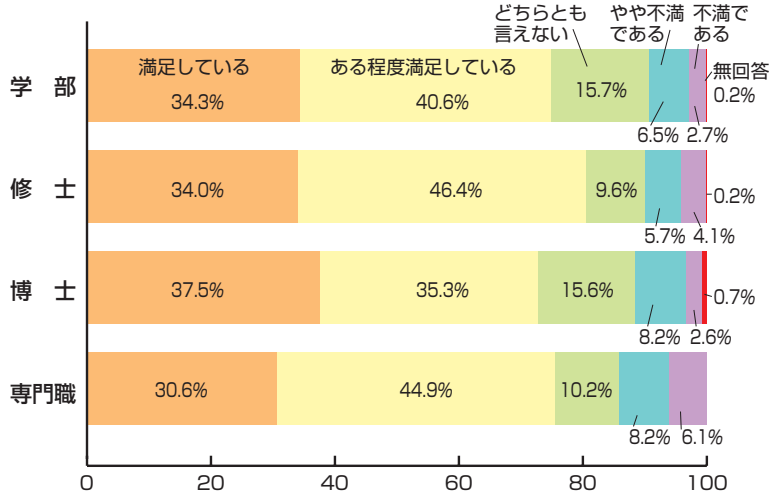
入学時に将来の進路を《決めていた》学生は、《ある程度決めていた》も含めると全体で62.2%であり、学部58.2%＜修士60.7%＜博士74.2%＜専門職83.7%の順番で高率になった。

在籍している学部等への満足度は比較的高い、カリキュラムに満足の学部生は過半数

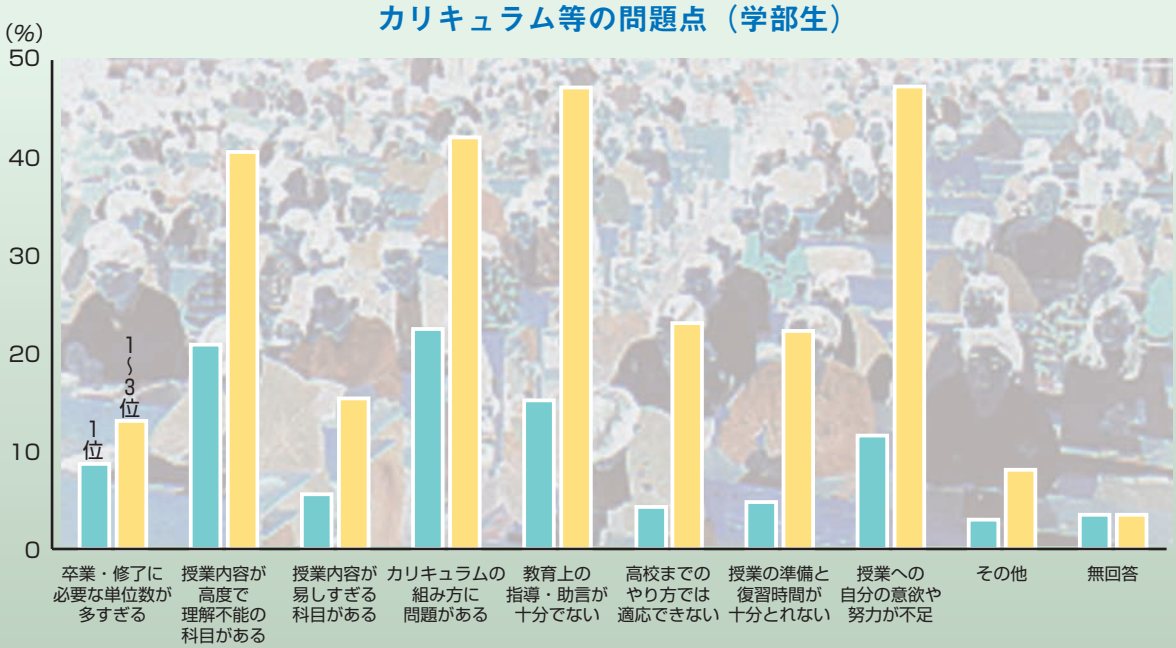
在籍している学部・学科・専攻等への満足度については、《満足・ある程度満足》が全体では76.5%を占め、前回(77.2%) とほぼ横ばいであり、各課程間でそれほど大きな差は見られなかった。また、《不満・やや不満》も、全体で9.8%と前回(9.2%) より若干増加したが、学部<修士<博士<専門職という傾向は前回と同じである。

学部生に対する「現行のカリキュラムに満足していますか」の問いでは、《満足・ある程度満足》が56.7%（前回54.8%)、《不満・やや不満》が20.3%（前回20.8%)、また、「現行のカリキュラムは消化できますか」の問いでは、《できる・ある程度できる》が83.0%（前回79.1%)、《困難・やや困難》が6.8%（前回7.6%）である。前回に引き続き満足度は増加傾向にあり、カリキュラムの適切化も進んできているといえる。カリキュラムの改善点についての問い（第1位〜第3位まで選択）では、《カリキュラムの組み方に問題がある》に次いで2番目に多かったのが、前回は《教育上の指導・助言が十分でない》(16.8%) だったが、今回は《授業の内容が高度すぎて理解できない科目がある》の21.6%となった。そして、前回3番目に挙げられていた《授業に対する自分の意欲や努力が足りない》が、4番目に後退したが、第1位〜第3位の合計では最多となっている。今年は、いわゆる「ゆとり世代」が入学し始めて4年目であり、今後の推移を見守りたい。

学部・学科・専攻等への満足度



カリキュラム等の問題点（学部生）

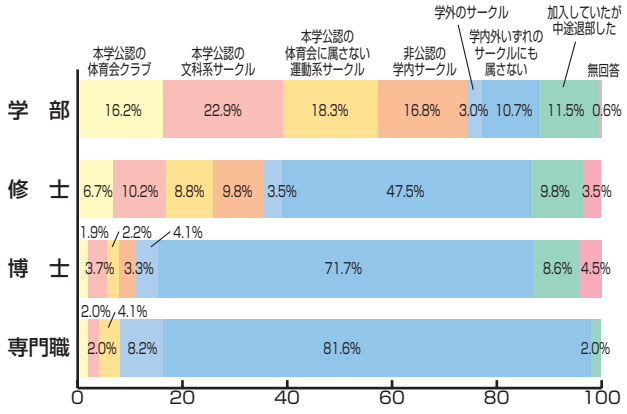


J. 課外活動（サークル・ボランティア活動）

学部生の7割超がサークル活動に参加

学部生の 77.2%が何らかのクラブ・サークルに加入しており、そのうちの 44.5%が 1 週当たり 5 時間未満の活動を行っている。これらの値に例年大きな変動はない。サークルの種別は、運動系の《本学公認の体育会クラブ》と《本学公認の体育会に属さない運動系サークル》が 34.5%で、《本学公認の文科系サークル》が、22.9%である。修士の加入率は 39.0%、博士の加入率は 15.2%であった。

クラブ·サークルへの加入理由（複数選択）は、《活動内容が好きだから》が 68.6%を占め、《友人を得るため》の 45.3%がそれに続いた。

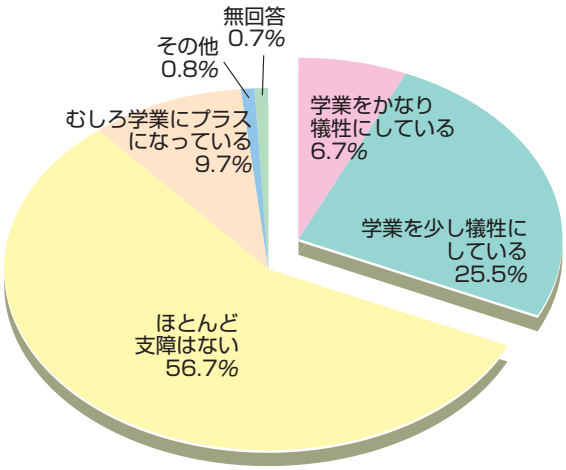


サークル加入率

学業との両立をわきまえたサークル活動を

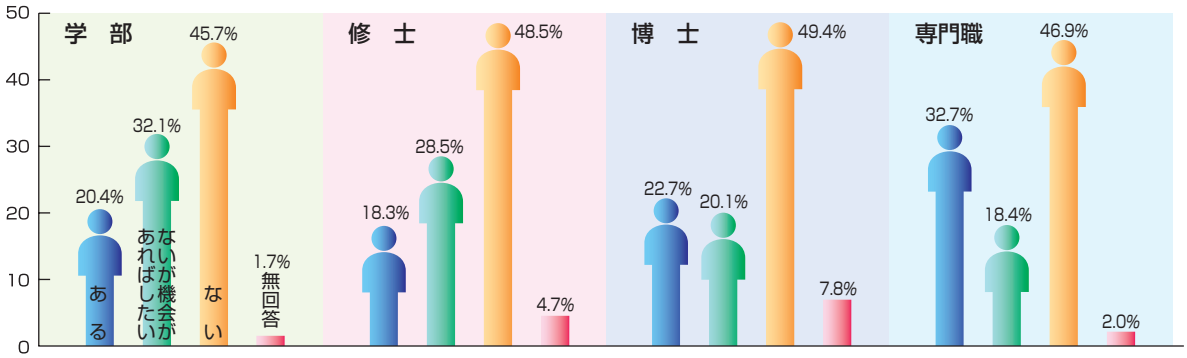
サークル活動と学業の関係では、《ほとんど支障はない》または《むしろ学業にプラスになっている》と回答した者の割合は、加入者全体の 66.4%で、修士と博士で、《ほとんど支障はない》または《むしろ学業にプラスになっている》と回答した者の割合が学部生より高かった。《学業をかなり犠牲にしている》または《学業を少し犠牲にしている》と回答した者の割合は、それぞれ 6.7%、25.5%であった。これらの値に例年大きな変動はない。

サークル活動と学業の関係



サークルに加入しない主な理由を2つ挙げてもらったところ、第1位に《時間がない》を挙げた者が、学部生では 18.4%であったのに対して、修士では 25.1%、博士では 33.1%、専門職では 43.2%であった。《学業の妨げになる》を第1位に挙げた者は、学部生では 14.9%であったのに対して、修士では 25.6%、博士では 19.3%、専門職では 35.1%であった。これらを第1位に挙げた者の割合は前回調査より概して増加している。

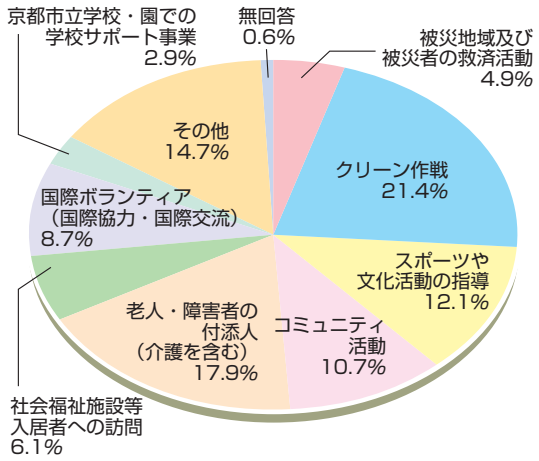
2割の学生がボランティア活動を経験



京大生のボランティア経験

京大生の21.3%がボランティア活動の《経験がある》と回答しているが、平成15年度調査以来29.2%、26.0%、21.9%と減少傾向にある。専門職では32.7%がボランティア活動を経験し、他の課程より経験者の割合が高い。

ボランティア活動情報のおもな入手先は、《友人・知人の紹介》が48.8%、《学内外のサークル》が23.0%であった。ボランティア活動の内容は、学部生、修士では《クリーン作戦》、《介護を含む老人・障害者の付添人等》が多かったが、博士ではそれらに加え、《スポーツや文化活動の支援》が多かった。専門職では《クリーン作戦》、《スポーツや文化活動の支援》、《コミュニティ活動に参加》、《国際ボランティア》が多かったが、《介護を含む老人・障害者の付添人等》は他の課程と比較して少なかった。



ボランティア活動の内容

ボランティア活動従事回数は、「年に数回程度」が3分の2を占めたが、過去の調査と比較するとその割合は減少傾向にある。5.3%の学生は《週に3回以上》従事していた。ボランティア活動を経験して《人生(社会) 経験が得られ有意義だった》と回答した学生が67.2%を占め、「あまり興味が持てなかった」と回答した学生は6.7%であった。

K. 旅　　行

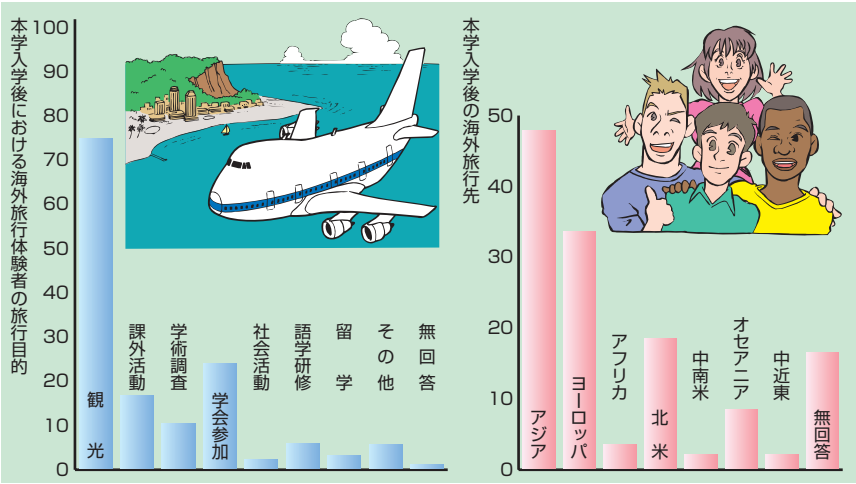
大学院生の外国旅行の目的は研究活動が主流

国内旅行について、全体の77.2%の学生はこの半年(平成21年4月～9月)の間に1泊以上の国内旅行をしている。国内旅行を《しなかった》と回答した学部生、大学院生は2割強程度であるが、専門職ではその割合は38.8%と他と比べて多い。

また現在籍課程入学後に外国旅行をした学生の割合は、学部生で39.2%、修士で45.4%、博士で62.5%と大学院学生の外国旅行の機会が増えていることが分かる。しかしここでも専門職ではその割合は26.5%と他と比べて少ない。

外国旅行の目的を2つ質問したところ、学部生で《観光》が88.7%、《課外活動》が22.3%、《語学研修》が9.8%となっているのに対して、修士では、《観光》が76.4%、《学会参加》が28.8%、《課外活動》が11.8%の順、博士では、《学会参加》が64.7%、《観光》が44.9%、《学術調査》が23.6%の順になっている。特に博士課程学生の外国旅行は学会参加や学術調査などの研究活動を目的とするケースが主であり、学生の活躍の度合いを示す指標の一つと解釈できる。

外国旅行の渡航先(複数回答)で最も多かったのは、全体として《アジア》、《ヨーロッパ》、《北米》の順で、これは、前回調査と順位は変わらないものの日本から近いアジアにシフトしている傾向がみられる。ただし博士では、《ヨーロッパ》が《アジア》上回り、《北米》の割合も増加している。学会活動がヨーロッパ、アメリカを中心としてなされている様子が見て取れる。

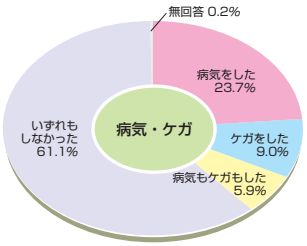


海外旅行体験者の旅行目的と旅行先

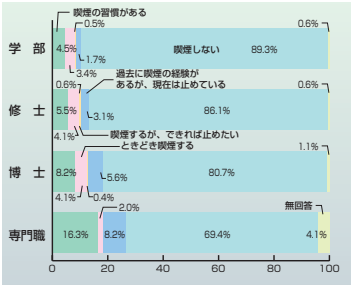
L. 健　康　・　悩　み

傷病を経験した割合が4割。悩みとしては、進路・就職と学業関連が多数、その相談相手としては先ず学内の友人・知人

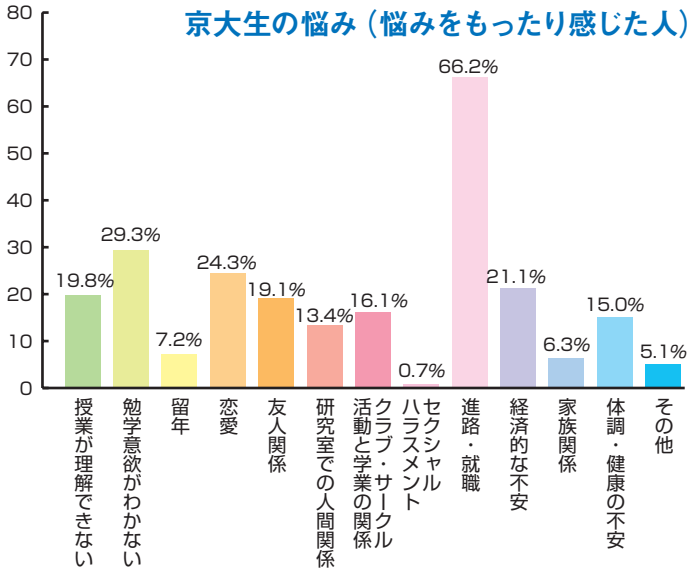
この半年間(平成22年4月～9月)に傷病をした割合として、《病気》が23.8%、《けが》が9.0%、《両方した》が5.9%、《いずれもしなかった》が61.2%である。傷病の原因としては、《不摂生》が36.2%、《心労》が22.7%、《スポーツ》が22.4%となっている。博士・専門職では何れもしなかった者も含めた全体の10%以上が心労を原因とした不調を感じているという結果は気にかかるところである。また治療日数が《2週間以上》という傷病をした者が全体の1割近くなっている。治療方法としては、《学外医療機関に通院》が50.9%、《自宅療養のみ》が24.9%、《入院を要した》者は3.1%となっている。健康維持のために行っていること(複数回答)としては、《食事に気をつけている》が46.3%、《スポーツ》が37.6%、《規則正しい生活》が33.0%であった。また、《とくに何もしていない》も37.7%に上った。喫煙については、禁煙している者も含めて現在喫煙習慣のない者が90.0%と年々健康への意識が高まっているようである。保険については、《京都大学学生健康保険組合》への加入割合は65.4%、《学生教育研究災害障害保健》への加入の割合は62.2%に上っている。



平成21年4月～9月の間に病気や怪我をした人



喫煙習慣



悩みについて(複数回答)は、《進路・就職》が66.2%、《学業関係(勉学意欲、授業が理解できない、留年)》が56.3%、恋愛が24.3%、経済的不安が21.1%に上っている。これらの悩みを先ず相談する先は、《学内の友人・知人》、次いで《学外の友人・知人》と《家族》となっている一方で、誰も《相談相手がいない》との回答も8.5%に上っている。

M. 進路（進学・就職）

大学・官公庁の教育・研究職へ就職希望が減り続けている

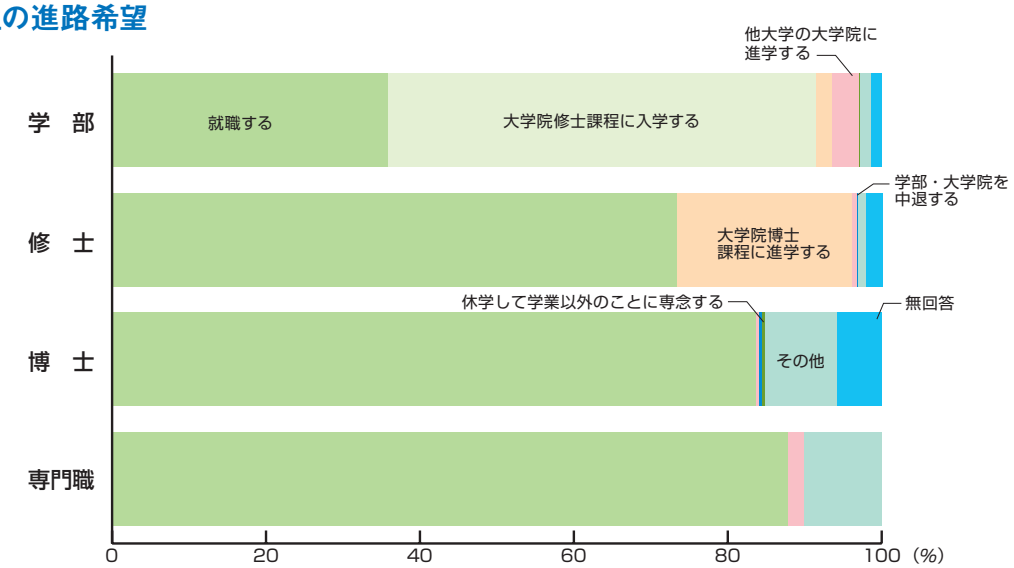
学部生の62.0%が進学、36.4%が就職を、修士では、23.9%が博士課程への進学、74.9%が就職を希望している。これらは、平成13、15、17、19の調査であまり変化なかったが、今回は学部生の就職希望が目立って増加している。

将来の職業について、全体では《大学・官公庁の教育・研究職》が23.6%で1位を保っているが、2位の《企業等の研究職》22.5%とほぼ同レベルとなっている。平成13、15、17、19年度の《大学·官公庁の教育·研究職》の希望は、それぞれ35%、30%、27%、25%であり、長期的な減少傾向が依然止まっていない。博士に限れば、《教育·研究職》の値は59.9%で前回(54.5%) よりは増加している。3位は、技術職と総合職が13.7%で同数となっていた。専門職では、59.2%が弁護士等の専門的職業を希望している。

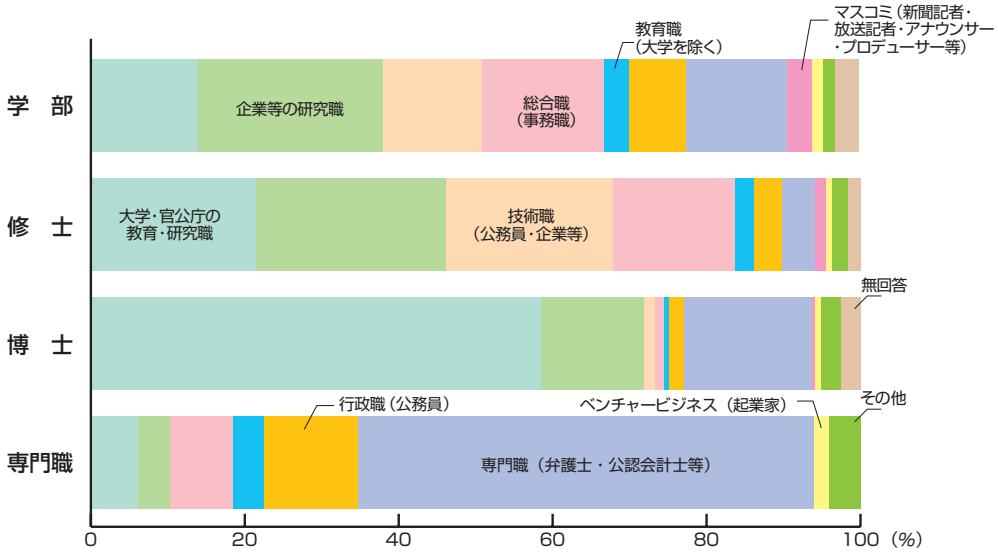
職業選択の理由として上位を占めるのは、理由の3番目までの総計で、《自分の特技·能力や専門知識が活かせる》が60.9%、《人を助けたり社会に奉仕できる》が43.7%、《安定した生活が保障される》が31.2%、《十分な収入が期待できる》が31.1%、《独創性や創造性を発揮できる》が25.9%であり、過去3回とあまり変化はない。なお今回から新たに選択肢に加えた《自分自身の成長が期待できる》が45.8%と第2位の理由となっている。第1番目に何を選ぶかに限ると《専門知識が活かせる》が依然1位ではあるものの、H13年度の年の51%から、47%、41%、38%、今回の30.0%と長期的な減少傾向が止まらない。一方、《社会に奉仕できる》はH13から今回まで14%、16%、21%、22%、27.1%となっていて、増加を続けている。

仕事や職場を選ぶ際に第1番目に重視する項目は全体としては、《やりがいがある》が33.2%、《給料がよい》が23.6%、《能力を発揮できる》が9.6%、《休暇を取りやすい》が5.9%、《職場の人間関係が良い》が5.7%であった。一方、就職地域の希望では《京阪神地区》が39.1%、《地域を問わない》31.7%、《首都圏》17.2%の順であった。これら両者の順序・数値とも、前回、前々回とほとんど変わらない。

京大生の進路希望



将来希望する職種



N. そ　の　他

教育関連事項を要望する学生の割合は前回より低下

本学学生の自転車運転マナーについて近隣住民の方などから多数の苦情が寄せられていることもあり，「本学学生のキャンパス内外における交通マナー」について学生自身どう思っているか今回尋ねたところ，《良い》が8.1%、《普通》が37.9%，《悪い》が53.6%であった。前回調査では，「自転車運転マナー」について尋ねたが、《悪い》《非常に悪い》を合わせて46.1%であった。本学学生の交通マナーが悪いと考えている学生はかなり多く、また増えていると考えられる。

国立博物館・美術館や茶道資料館の利用に特典があることについては，全体で半数近くが知っており，そのうち4割が実際利用していると回答した。前回調査では、約3割が知っているという結果であったので、認知度は上昇している。

大学に特に要望や期待することについて順不同で5つまで尋ねたところ、全体で最も多かったのが《自転車置き場の改善・充実》の34.6%で、順に《授業方法の工夫・改善》が32.6%、《国の奨学金制度の拡充・充実》が32.2%、《自由に利用できるスペースの拡充》が30.0%と続く。

前回調査と比べると《授業方法の工夫・改善》・《授業関連施設の充実》・《学生への連絡方法の改善》・《自由に使えるLAN環境》・《各施設の使用時間の延長》・《教職員の学生への態度》という事項を要望する割合が、学部生では5%以上低下している。修士と博士においても、これらの項目の要望割合の低下傾向がみられる。

このような教育関連事項の要望割合が、まだ高いとはいえ、前回と比べて低下したことは、近年活発化している各学部・研究科のFD活動の成果といえるかもしれない。逆に、若干ではあるが要望割合が、前回と比べて高くなったのは、《国の奨学金制度の拡充・充実》と《就職対策の充実》である。これは、経済状況の悪化を反映しているといえる。

大学への要望・期待すること

(%)

	学　部	修　士	博　士	専門職
カリキュラムの改革	28.3	14.7	12.3	36.7
授業方法の工夫・改善	38.6	24.6	17.8	49.0
授業関連施設の充実	13.1	7.7	6.7	18.4
課外活動施設の充実	16.7	9.2	4.5	6.1
福利厚生施設の充実	5.2	10.6	9.7	8.2
国の奨学金制度の拡充・充実	22.6	35.0	49.8	34.7
カウンセリングや相談体制の充実	2.9	3.1	4.8	8.2
図書館の充実	20.4	20.4	21.6	20.4
就職対策の充実	23.1	24.0	22.7	12.2
トイレの改善	9.6	10.8	7.1	14.3
学生への連絡方法の改善	18.8	17.5	11.2	4.1
自転車置場の改善	37.8	28.9	25.3	44.9
体育施設の開放	11.7	12.6	5.9	14.3
LAN 環境の改善	10.7	12.2	17.8	16.3
学生自治の尊重	4.8	5.5	3.0	2.0
自由に利用できるスペースの拡充	32.8	25.9	19.0	42.9
各種施設の利用時間の延長	25.4	16.7	18.2	28.6
教職員の学生への態度	8.7	8.3	13.4	18.4
そ　の　他	4.4	8.8	9.7	10.2

学生生活実態調査の利用について

学生生活実態調査の利用については、直ぐに調査結果を反映できる事項とできない事項がありますが、長期的には大学としての施策立案に本調査結果を参考にしています。

例1．図書館の現行の利用時間は、本調査において利用時間の延長を希望する声が多いものを反映した結果です。

例2．トイレの改修についても、改修希望の声が多いことを反映して順次改修しています。

例3．その他アクションプラン等においても学生生活全般の環境整備が調査結果を踏まえて実施・検討されています。（課外活動施設新営、桂の厚生施設等）

例4．授業料免除で貸与奨学金や家計支持者死亡の保険金を所得に算入しない等の制度改善や民間奨学金の HP 掲載等による情報提供の推進に努めています。

京都大学学生生活白書

平成 21 年度《学生生活実態調査》のまとめ－概要－

平成 22 年 3 月　発行

編　集　平成 21 年度学生生活実態調査委員会
委員長　宇 仁　宏 幸（経済学研究科教授）
委　員　加 藤　博 章（薬学研究科教授）
冨 永　　達（農学研究科教授）
手 塚　哲 央（エネルギー科学研究科教授）
片 井　　修（情報学研究科教授）
藤 井　滋 穂（地球環境学堂教授）

発　行　京都大学学生部
〒 606-8501　京都市左京区吉田本町